

仲間と共に「山ラー」を国内外に発信

私の年代までもかもしれません。山形市民の多くの方が、経験しているのではないかと思うのですが、お客さんの来ると「中華をとる」が昼の頼み、それが私とラーメンとの出会いです。もてなしで、小さい頃に祖父母がよく近所の蕎麦屋さんに中華の出前を中学2年のとき、友達に誘われて

コロナ禍の苦境から一転、山形ブランドを象徴する存在となった「山ラー」。3年連続消費量日本一を達成、やまがたのラーメン文化の魅力を広く発信し、消費の拡大と誘客を促す。その火付け役となったのが、ラーメン店主らが立ち上げた『ラーメンの聖地、山形市』を創る協議会。ラーメンの道を志して30年、「支えて下さる方々がいるからこそ今があると思っています。山形市、市民、仲間と共に『山ラー』発信に努めていきます」と語る会長の「麺辰」店主鈴木敏彦氏（49）に登場してもらった。以下、聞き書き。



仲間と共に国内外に「山ラー（山形のラーメン）」を発信したいと語る麺辰店主の鈴木敏彦氏



モンテディオ山形のホームゲームでは、長女の愛実さんがキッチンカー「お結び処」で、おむすびと特製鶏中華を提供している

ラーメン店「麺辰」

〒990-2422 山形市中桜田2-5-5
☎023-666-8570

総務省の家計調査で山形市は1世帯当たりのラーメン外食費3年連続全国1位となり、佐藤市長、ラーメン店主がくす玉を割って祝う12月7日、山形市役所



学校近くの「五一ラーメン松波店」で初めて味噌ラーメンを食べ、大げさではなくて「こんなにもうまいラーメンがあるのか」と感激。若い店主のかっこ良さに憧れて3年間アルバイトをし、それから鳥中華で人気の山形市漆山の「寿々喜そば屋」の親父さん鈴木秀章氏の下で、13年間修業させていただきました。

独立したいという私の思いを知って親父さんは、仕事のことはもちろん、いろんな所に連れていってくれ、いろんな方と会わせてくれました。働きながら、独立するための資金作りと体力作りを兼ねて3年半、山寺街道の新聞専売所で新聞配達をやりました。バイクに朝刊180部を積み、未明から明け方にかけて約2時間。元旦号は本紙のほかに分冊があり、重くて時間内に配達するのに難儀しました。

現在地に開店したのは2008年6月。私とカミさん、スタッフ2人でスタートしましたが最初は閑古鳥が鳴くほどだった。3年目に入った頃に「伸びにくい、コシのある、歯切れのいい」自家製麺に切り替え、さらに、グルメリポーターのパンチ佐藤氏が出演する地元テレビ局制作の「われらラーメン王国」で紹介されたこともあって、多くの人が来店してくれるようになりました。

私が会長を務めている「ラーメン

の聖地、山形市」を創る協議会」が設立されたのは令和4年11月11日です。今年2月現在、会員は163団体。ラーメン店が133、製麺業など関連事業者30団体で、タイ・バンコクで山形市出身の方が開いている店も会員になっています。

協議会設立のきっかけは大きな打撃を受けたコロナ禍と、新潟市に家計調査における「ラーメン消費額日本1位」の座を明け渡したことです。ケンちゃんラーメン山形の店主阿部勝重氏を中心に市内ラーメン店有志が発起人となって、佐藤孝弘市長にラーメンによる地域おこしを提案しました。

令和5年に日本一の座を奪還し、佐藤市長が「ラーメンの聖地、山形市」を宣言した2月8日を「山形市ラーメンの日」に制定。「山ラー」の愛称を商標登録するとともに。市内のラーメンを紹介するサイト「#推メンやまがた」を開設。外国人観光客向けに多言語化し、味や麺の太さなど好みの種類の店を探しやすいデジタルマップを作成するなど、シテイプロモーション（ラーメンプロジェクト）を展開し、背中を押してくれています。佐藤市長は「これからの他の自治体と切磋琢磨し、バラエティに富むやまがたのラーメン文化の魅力を広く発信し、観光振興やにぎわいづくりに活かし

たい」と話しています。

コロナ禍では店を休まざるを得ない時もありました。しかし、必ず回復すると信じ、コロナ融資を受けてスタッフの確保、インバウンドに向けたキャッシュレスの導入、店の改装など、コロナ後を見据えて思い切って投資しました。今年の冬は当店にも外国の方が数多く訪れました。私が店をオープンした頃は、全国から、ましてや海外から山形にラーメンを食べに来ると考えたこともありませんでした。

令和5年7月に、キッチンカー「お結び処」をプロデュースしました。きっかけは東日本大震災で、食料が不足している中、麺屋でも何かできないかと始めた「おむすび」の販売。当時小学5年生だった長女が、もつとたくさんの人に食べていただきたいと提案しました。お米、海苔、塩、具材にこだわった「おむすび」を提供しています。

現在、麺や具材の仕入れ価格や燃料費の高騰、人手不足などで首都圏を中心に廃業・倒産が増加していると報じられています。しかし、おもてなしの心でお客さまを大事にし、日々の仕事を大切に積み上げれば、今後も「日本一」の称号を得ることが出来ます。仲間と共に国外に向けても「山ラー」を発信していきたいと思っています。